

A T W A N N O V E L S

# 台灣抗日小說選

陳逸雄編選



# 台灣抗日小說選

陳逸雄編訳

研文出版

陳 逸雄 (ちん いつゆう)

1929年台湾生まれ。

台湾大学卒業。

研文選書 41

---

台湾抗日小説選

1988年12月1日 初版第1刷発行

定価1800円

著 者 © 陳 逸 雄

発 行 者 山本敬太郎

発 行 所 研文出版 (山本書店出版部)  
東京都千代田区神田神保町 2-7  
郵便番号 101 振替東京0-59950  
電話 東京 (03) 261-9337

印 刷 清水印刷所

カ バ ー モリモト印刷

製 本 大 口 製 本

---

1988 Printed in Japan

ISBN4-87636-084-7

台灣抗日小說選／目次

まえがき — 3

## 頼瀬雲

秤 — 22

豊作 — 36

事を惹き起こして — 47

## 陳虚谷

無実を晴らす由もなく — 68

故郷に錦を飾る — 94

爆竹 — 109

## 楊守愚

十字街頭 — 126

容疑 — 133

処罰 — 143

蔡愁洞

保正さん — 158

一等賞 — 169

新興地の悲哀 — 182

朱点人

秋の便りに誘われて — 200

抜け目ない男 — 214

王詩琅

没落 — 236

自滔

失敗 — 257

題字

陳逸雄

台灣抗日小說選





## まえがき

台湾に新文学が誕生したのは、一九二〇年代に入ってからである。ここに言う新文学とは、それまでの韻律、形式に拘束された漢詩や文語で書かれた漢文と違って、形式、韻律にとらわれない自由詩や白話（口語）で書かれた小説、散文のことで、その誕生の母胎となったのは、当時東京に学んでいた学生が刊行していた雑誌「台湾青年」である。

台湾から東京への留学生は、一九〇八年（明治四十一年）六〇名だったのが、一九一五年（大正四年）には三百余名、一九二二年（大正十一年）には二千四百余名へと急増した。一九一九年に六三法の撤廃および台湾議会の設置を目的とする留学生団体啓発会（間もなく新民会と改称）を創立、翌年には前記雑誌を発刊、同誌はその後名称を台湾、台湾民報、台湾新民報と変え、月刊から半月刊、旬刊、週刊、日刊へと成長し、発行地を東京から台北に移して行く過程で、新文学をはぐくむ揺籃ともなった。

台湾新文学には発足当初から、底流に強い民族意識が脈打っていた。周知のように日清戦争の結果、台湾は一八九五年日本に割譲されたが、平和裏に移交されたのではなく、割譲に承服し

ない台湾人民を制圧するため、日本は近衛師団を核とする数万の陸海軍を投入し、台湾の南北両地に上陸して現地義勇軍と長期にわたる戦争をせねばならなかった。注意に値するのは、義勇軍の指導者に徐驤、吳湯興、林李成、林維新など、筆を抛って従軍した読書人が多くいて、台湾防衛戦に殉じた人もいたことである。

七年の歳月を経て、抗日義勇軍と抗日ゲリラが終熄した後も、山地原住民の武装抗争が間断なく続き、一方平地においても武装抗日事件が続発し、一九一五年（大正四年）に至って、多大な犠牲を払いながらも、連綿と続いた武装蜂起は山地を除いて一段落を告げた。

こうした情勢の推移は、日本の台湾統治が軌道に乗ってきたことを示すもので、それに対応して武力抗日は、文化的手段による抗日へと方向転換することになった。啓蒙団体としての文化協会の誕生がそれであり、その思想系譜を文学の場で継承したのが、新文学運動であったとも言える。

かかる歴史背景を持つ台湾の新文学運動の特色は、まず中国の文学革命から多大な影響を受けたことにある。白話文の提唱、文学のあり方をめぐる論議があり、胡適や陳独秀の文学論、魯迅その他の中国作家の作品が紹介された。台湾の新文学運動は、その基本理念および発展過程において、中国の文学革命の後を追いつ、その成果を生長の滋養として摂取したと言つてよい。中国の文学理論や中国文壇の状況を紹介する面では、特に張我軍と蔡孝乾が中心的役割を果たした。

他方で台湾の新文学運動は、当然のことながら日本から無視できない影響を受けた。前述し

たように、当時台湾人の留学先は日本本土が圧倒的に多く、中国大陆がそれに次ぎ、欧米への留学はごく僅少だった。西田幾太郎、河上肇、福田徳三、田中王堂、杉森孝次郎、厨川白村、生田春月、土田杏村、岸田国士、武者小路実篤ら大正文化を形成した人たちの著作が、新文学運動に携わった人々の精神の糧になっていたのは、当時の文学論争その他を通じて容易に看取できる。また大正デモクラシーの比較的自由な雰囲気、ウイルソン大統領の民族自決論などと相俟つて、台湾の社会運動、新文学運動に相應の刺激を与えたであろうことは推察に難くない。

とはいえ、新文学運動の初期から中期にかけての創作活動の主流を、日本留学生が占めていたわけではない。本書に収めた七人の中で経歴が明らかな六人を見ても、日本留学生は陳虚谷一人だけで、それ以外は台湾にいた人たちである。それと言うのも、謝南光のように日本語で創作を試みた少数の人もいたが、当初新文学の主流は日本語でなく、白話文であったからである。しかし一九三二年頃から様相が変化し始め、日本語による創作が数を増すにつれて、日本の影響は一段と色濃い影を落とすようになっていく。

ところで、見逃すことのできない日本の間接的影響として、日本語を通じて西欧の思想や文学を摂取したことを挙げてよいだろう。日本の書籍は、中国書籍より入手しやすかつたし、日本の翻訳は、中国のそれに一步も二歩も先んじていたからである。これは頼和や虚谷の蔵書にはつきりその痕跡を看取することができ。

新文学運動が進展する過程で避けて通れない一つに、旧文学陣営との衝突があるのは、台湾

も大陸と同じであつた。台湾における旧文学の主流を占めていたのは漢詩人で、当時台湾には百を上回る漢詩社があつたと言われ、本書に収めた朱点人の小説「秋の便りに誘われて」の中で、詩社が林立して唐の隆盛期に劣らないほど多くの詩人が輩出した、と書いているのは事実である。台湾知識人の懷柔策として、台湾総督児玉源太郎が一九〇〇年（明治三十三年）に揚文会を作り、科挙及第者らを年に一度招いて宴を開き、文を囑して吟詠に興じ、後任総督も折にふれて同じ催しをしていることから、台湾社会での旧文人の重要性を窺い知ることができよう。

新文学陣營の旧文学陣營に対する攻撃の第一点は、百千年来の文学の諸規範を捨てようせず、日常の生活や情感に即した創作をせず、無味乾燥な字句を並べて、世界の文学潮流から全くかけ離れた所で高軒をかいている、というものであつた。

これに対する反論の一例に次のようなものがある。

今の学士、口未だ六藝りくぎの書を読まず、目未だ百家の論に接せず、耳未だ離騷りさう樂府がふの音を聴かず、而るに囂囂ごうごう然として曰く、漢文廃す可し漢文廃す可しと。甚だしきは新文学を提唱し、新体詩を鼓吹し、故籍を批糠ひこうし時髦じぼうを自命す。我其の謂う所の新しきもの何くにあるかを知らず。其の謂う所の新しきもの、西人の小説戲劇の余を持し、其の一滴を丐とり沾々せんせんとして自ら喜ぶ。是れ誠に坎窞かんけんの蛙かむすにして、汪洋おうようの海を語るに足らざる也。噫！（張我軍の攻撃に対する連雅堂の論駁）

次に攻撃の第二点は、一部の旧文人が文学を社交の道具に供して、節操を顧みないことに鋒

先が向けられた。台湾に漢詩社が簇出したのは、多分朱点人が小説の中で述べているように、日本への割譲が、本来の言語、文化に対する危機感を招来したからであろう。だが総督や知事のもてなしを受けては詩作で善政を讃え、顔を見たこともない総督が詩を発表すると、各地の詩人が詩を和して応酬するという風潮さえ生じた。新文学陣営は、これを恥すべき文学の墮落として批判したのである。

これに対する論駁の事例を次に挙げよう。

上山督憲（督憲は総督の別称）の感懷詩は堂皇典雅なり。是れを以て島内の騷人墨客とする者甚だ多し。要するに亦た風雅を廣揚する一つの道なり。實際の社会の事態万端を顧みるに、思想懸殊して抱負互いに異なる。事々物々其の自然に随えば、則ち清き者自ずと清く、濁れる者自ずと濁る。奚ぞ人を強いて己に就かしめ、妄りに詆毀を加うる可けんや。（陳虛

谷の批判に対する「台湾日日新報」無腔笛の反論）

新旧文学の論争は折にふれて持ち上がり、一九四〇年代に入っても行われている。こうした曲折を経ながらも、自由詩や小説が続々発表され、民謡の蒐集や新劇運動まで裾野が広がって、新文学運動は一時かなり高揚した機運を迎えた。南首、台湾文芸、台湾文学、台湾新文学その他の文芸誌が刊行され、台湾文芸協会、台湾文芸聯盟など数々の文学者団体も結成された。

一方で新文学運動は、それ自身一つの問題を抱えていた——それは言葉の問題である。当時台湾で創作に使われていたのは、多少の台湾語が混入されているにしても、基本的に白話文であった。白話文は北京語を話す人にとっては口語であるが、台湾語を話す人の口語ではない

（台湾語と言っても閩南語、客家語、高砂族と呼ばれる原住民語など多種あるが、新文学について言う場合は閩南語〔または福佬話〕と解釈されたい）。

そこで台湾の特殊性に鑑み、台湾独自の文化を建設するため、台湾の言葉で台湾の事物について詩や小説を書け、という主張が持ち出された。これは白話文に対して、台湾話文と呼ばれた。

だが、台湾話文による創作は新字、新語を伴い、更に重大なことは、台湾、大陸間の文化紐帯を断ち切ることになるという懸念が一方にはあった。従つて、台湾は中国と不可分の関係にあり、台湾でも白話文で創作すべきであるという対立意見との間に論争が巻き起こった。もともと白話文が提唱されたのは、大陸との文化的整合性を図る以外に、白話文を使うことによつて台湾語の改革を促すことを意図するものでもあった。

新字の問題、大衆を文盲から救う道、大衆文学の建設、ローマ字化などの諸問題を含むこの論戦は、一般に郷土文学に関する論争と呼ばれている。本書の作品について言えば、みんな白話文で書かれているが、台湾語を混入しない作品は一篇もなく、その度合いは蔡愁洞が最も顕著で、王詩琅、自涪は少ない。

問題が問題だけに、結論を見ずに論争は一旦打ち切られたが、それから僅か数年後には、かかる議論一切を吹き飛ばしてしまう破局が訪れた——後述する新聞雑誌の漢文欄の廃止令がそれである。

一八九五年の台湾領有後、教育に関する総督府の措置は相当に機敏だったと言える。大眼目

はもちろん日本語を普及させて、忠良なる日本国民を育成することにあつた。前述したような混沌とした状況の中で、一八八六年には国語学校規則を發布して芝山巖に学校を設置、二年遅れて公学校令を制定した。(台湾では初等教育が小学校と公学校に分かれ、前者は日本人、後者は台湾人の学校である。小学校令第一章第一条に「小学校は内地人学齡兒童を教育する所とす」とあり、公学校規則第一章第一条も「公学校は本島子弟に云々」とある。台湾における差別教育の始まりで、一九四一年(昭和十六年)四月、国民学校の名称に統一されるまで続いた。)

同じく一八八八年に書房義塾(いわゆる漢学塾)に関する規程を制定して、日本語教課を導入した。台湾人が本来の文化を継承するのを嫌つた当局の干渉圧迫も手伝つて、一八八六年(明治三十九年)一、一二七カ所あつた塾数は、一九三九年(昭和十四年)には一四カ所に激減した。一九一三年(大正十二年)には庁の命令、告示、論告に付されていた漢訳が廃止された。以上の諸措置は、総督府が如何に日本語の普及に積極的であつたかを物語っている。

一九三〇年(昭和五年)に台湾最後の武装蜂起と言われる霧社事件が発生、翌年満州事変が勃発するに伴い、相次いで加えられた弾圧で、台湾の社会運動はほぼ潰滅した。この時、新文学は依然健在で、当局の監視、検閲が強化されていくさなか、日本語を駆使する作家たちをも加えて、むしろ百花繚乱の觀を呈したが、白話文新文学は僅か数年の余命を保ち得たに過ぎず、一九三七年即ち日中戦争が始まつた年に、新聞雑誌の漢文廃止という一片の命令で、崩潰に追い込まれた(一つだけ生き延びた雑誌がある。「風月報」と言い、後に「南方」と改称した。白話の自由詩、散文、

小説もあれば、漢詩、漢文もあるが、戦争協力の色合いが濃厚である。漢文欄の廃止と名付けられたこの措置は、その実、白話文による創作を禁止したもので、伝統的漢詩は残存することを許された。山水花鳥を咏じ、懷古の情にふける類の漢詩なら容認の余地はあるが、現今の潮流、社会の動向と深く関わる、思想伝達の工具として、情況次第によつては大陸と氣脈を通じかねない白話文は扼殺すべし、ということであろう。残存数は極めて僅少であつたが、漢學塾がその後なお三年を経て、一九四〇年になつてから廃止されたことから、總督府の意図は明白である。

しかし、原点に立ち返つてその歴史的精神を省察すれば、皇民文学に埋没することなく、死刑を宣告された白話文新文学は、むしろ榮譽ある玉碎を遂げたと言つてよいだろう。

白話文で創作していた人たちは、楊雲萍のように日本語に切り換える例外的な存在もいたが、概して言えば取るべき道は三つあつた——筆を封じるか、発表の当てがない作品を書き続けるか、それとも漢詩を書くか、である。発表できる当てもない作品を密かに書き続けることが、より積極的な抵抗であるとするれば（作品が植民地政治の批判である場合）、激化する戦争の最中に、戦争と無関係な漢詩を、新聞の片隅に小さく残された漢詩欄に載せ続けることも、また抵抗の一つの姿勢を示したものとは言えまいか。

この時から一九四五年、日本の統治が幕を下ろすまでの間、日本語を駆使する人たちの作品だけが紙面を飾ることになる。しかし戦局が緊迫拡大するにつれて、一九四〇年日本本土で結成された大政翼賛会は、翌年皇民奉公会と名を変えて台湾で発足し、書く手を停めなかった作家は、大半が台湾文学奉公会に組み込まれていった。当然ながら決戦文学の隊列に加えられた



以上、大東亜文学者大会への参加や、皇民文学への参入を余儀なくされた人も少なくない。中には新文学運動の輝ける旗手と衆目が一致して見る人も、不屈の抗日作家と謳われている人もいる。

台湾人作家の皇民文学を最初に提起したのは、尾崎秀樹氏が一九六一年に発表した二つの論文だろう。屋崎氏の論説は、それから十八年後の一九七九年になって、ごく一部が「聯合報」で紹介され、更に翌年には完訳ではないが翻訳されて、「台湾史論叢」に収められた。にもかかわらず、折にふれて言及されてはいるが、皇民文学問題は殆どと言つていいほど、台湾では正面切つて取り上げられていない。近年来僅かに張恒豪氏が意欲的に別な角度から取りあげてこの問題にも光を当てているぐらいなものではないだろうか。

生存者が今なお多いことが、取り上げにくい原因の一つであるが、世を去った人の場合でも、人の古傷を暴くのは、人たるの道に厚い所以ゆえんでない”という感覚で受け止められているからでもある。そのほかに、資料が充分に発掘されていない、という事情も原因の一つであろう。だがそのために、再三、皇民文学に筆を染めながら、今にしてなお不屈の抗日作家と称揚される、という奇妙な現象が存在する。道義心を重んじることには異論はないが、他方で歴史家が歴史の真実を伝える義務があるように、文学者には文学の真実を伝える責務があろう。

皇民文学は本人の意志に反して行われた、国家権力の強制による所産で、全く文学としての意義を失ったものであるから、価値判断の対象にはならない、とする議論もある。そうだとすれば、皇民文学を書くまいとして筆を封じた人、発表できない作品をひそかに書いた人、竹内